OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第2回 日本語日本文化教育センター教育研修会
Author(s)	
Citation	大阪外国語大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2007, 5, p. 53-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5555
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第２回　日本語日本文化教育センター教育研修会　報告

実施概要

日時　　2006年９月16日（土）10：50～12：20

場所　　日本語日本文化教育センター棟１階　多目的ホール

プログラム

１．センター長挨拶

２．パネルディスカッション「日本語日本文化教育センター留学生の最近の動向」

パネリスト

五之治昌比呂（日本語・日本文化研修プログラム　研究コースコーディネーター）

山川　太（日本語・日本文化研修プログラム　研修コースコーディネーター）

今井　忍（短期留学プログラムのための日本語コースコーディネーター）

コーディネーター　　中田　一志（学務委員会委員長）

３．教育事例報告・教育研究発表

頓宮　勝　「日本文化の授業としての宗教」

國方　栄二「漢字授業の経験から」

４．閉会

総合司会　嶋本隆光（学務委員会副委員長）

パネルディスカッション
「日本語日本文化教育センター留学生の最近の動向」の概要

パネリスト

五之治昌比呂　日本語・日本文化研修プログラム　研究コースコーディネーター

山川　　太　日本語・日本文化研修プログラム　研修コースコーディネーター

今井　　忍　短期留学生プログラムのための日本語コースコーディネーター

コーディネーター

中田　　一志　学務委員会委員長

１．趣旨（中田）

本センターが提供する授業科目は大ざっぱに言えば、同じ日本語能力レベルの学習者が共通に必要とする科目（必修科目）と学習者ごとに必要な科目（選択科目）に分けられる。そう書くと選択科目は脇役だと思われるが、次のような理由により選択科目は重要である。

日本語学習の機会は一昔と比べ大幅に増え、日本語や日本文化を母国の高等教育機関のみならず中等教育機関、日本語学校、さらには独習で学んだ留学生が本センターで学習するようになり、最近特に留学生の背景の多様化が見られるようになってきた。それにともない、学習者ごとに必要な科目として選択科目の重要性が高くなってきている。

多様な背景を持つゆえに、プレースメントテストの結果、日本語能力が総合的に同レベルだと判断されても、漢字、語彙、文法、発音などの個々の習得が不十分であったり、卓越していたりする留学生が少なからずいる。また、個々の能力は十分であるのに、総合的なコミュニケーション能力、読解能力や聴解能力が十分ではない留学生もいる。

さらに、本センターの留学生は、海外の本籍大学で日本語だけではなく日本学の中の様々な分野を専攻している留学生が多数である。

この度の教育研修会のシンポジウムでは、本センターが受け入れる留学生が背景的に専門的に多様であるということを念頭におきながら、教育の基本に立ち返りたいという思いで企画した。教育の基本要素は誰に何をどのように教えるかであるが、その中でも「誰に」に焦点を絞り、本センターが最近どんな留学生を受け入れてきているのか、どんな背景を持った留学生がいるのか、本センターの学務委員会の委員であり、上記のような多様性を持つ学生のほとんどが配置される、そして中・上級レベルの日本語能力を持つ学生が配置される日本語日本文化研修留学生プログラムの研究コースコーディネーターである五之治氏、同プログラムの研修コースコーディネーターの山川氏、短期留学生プログラムのための日本語コースコーディネーターの今井氏にお願いして討論を行った。

本センター学務委員会はこれまで学期はじめに新任の講師を対象としたオリエンテーションを毎学期行ってきているが、さらに積極的に本センターの留学生およびそれぞれのプログラムの特徴などについて情報を提供しながら、彼らがどんな授業を希望しているのかということについてもう一度考える機会を提供できたならば幸いである。

なお、当日は時間の都合で十分な討論はできなかったが、秋学期から春学期にかけてそれぞれのコースの学生の興味がどう変化するのか、どのような科目を履修する傾向があるのかといったことについて討論したが、それについては各コースの概要で触れてもらうことにする。

また、教育事例報告・教育研究発表をしていただいた頓宮氏と國方氏には、他の教育の基本要素である「なにを」「どのように」について大変有益なご教示をいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

2．留学生内訳数の推移（中田）

本センターの受け入れ留学生に絞ってセンターの沿革を眺めてみると、戦後の国費留学生の受け入れと同時に1954年に本センターの前身である留学生別科が設置され、その後、国際情勢とセンターの将来への方向性に基づき、各種の留学生を受け入れてきたことが分かる。以下がセンターの沿革である。

1954年４月	留学生別科設立
	国費研究留学生受入開始
1977年４月	中国政府派遣留学生受入開始、
	インドネシア政府派遣留学生受入開始
1980年10月	国費教員研修留学生受入開始
1985年10月	国費日本語・日本文化研修留学生受入開始
1991年４月	留学生日本語教育センター設置
	留学生別科廃止

国費学部留学生受入開始

1999年10月　**短期留学プログラム教育課程開設**

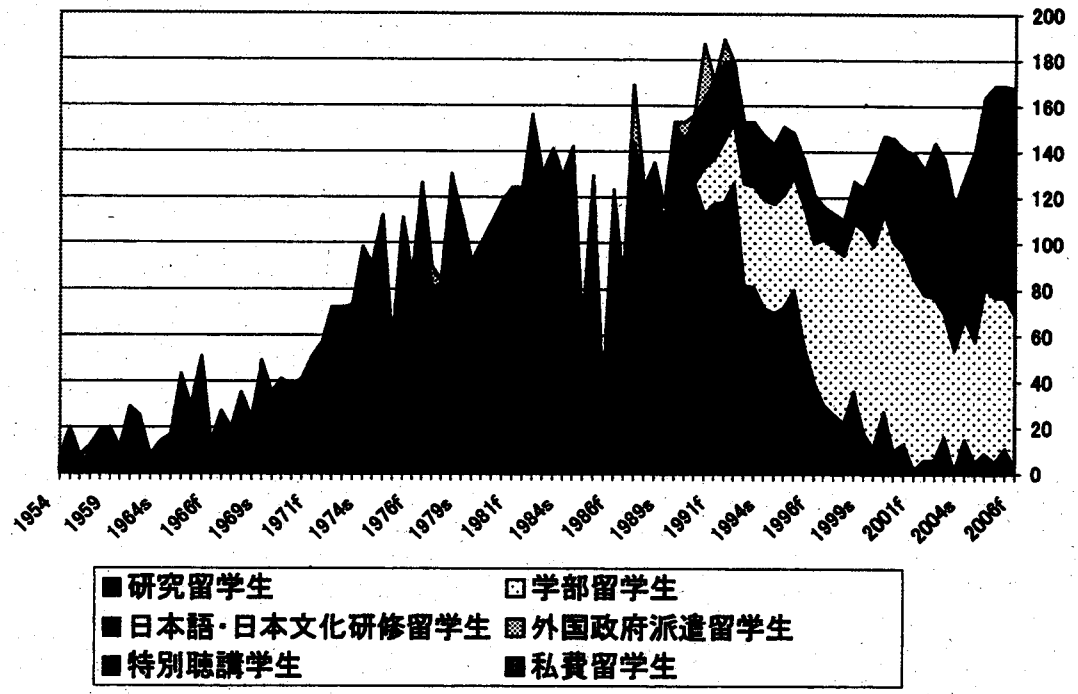
2005年４月　日本語日本文化教育センターに名称変更

2006年10月　**日本語・日本文化研修留学生特別プログラム開設**

わが国の留学生は、いわゆる「10万人計画」を2003年に達成した後も増加し、2005年度の統計では12,812名となっている。国費留学生数は9,891名と少数ではあるが、きれいな増加曲線を描いている。

本センターの留学生の大部分は国費留学生であるので、わが国の国費留学生のゆるやかな増加から推測すると、本センターの留学生にさして変化がなさそうである。しかし、その内訳にここ数年大きな変化があった。また、他の留学生の受け入れにも大きな変化があった。

留学生別科発足の1954年から2006年秋学期（予定）までの留学生の移り変わりは次のとおりである。



1992年春学期がピークで、190名近くの留学生が在籍していたが、近年は120～160名程度の留学生が在籍している。本センターは1991年春学期に学部留学生の受け入れを始めたのであるが、その学期は研究留学生113名、学部留学生20名、日研生30名、以上163名の国費留学生を受け入れ、他に外国政府派遣留学生24名を受け入れた。短期留学生の受け入れが始まった1999年秋学期においては、研究留学生11名、学部留学生88名、日研生19名、外国政府留学生0名、短期留学生16名となり（短期留学生は本センターでは特別聴講学生として受け入れている。）、今年度10月受け入れ予定数は、研究留学生3名、学部留学生66名、外国政府留学生0名、日研生47名、短期留学生50名、さらに秋学期より私費日研生のプログラムを開設し、２名の学生を受け入れる予定であるので、秋学期は168名が在籍する予定である。（聴講生などを省く。教員研修留学生は研究留学生数に含む。）

3．2007年度秋学期授業計画（中田）

本センターが提供するプログラムはその趣旨に応じた教育カリキュラムが編成され、上述のとおり大きく分けて必修科目と選択科目からなる。その編成の詳細については『授業研究』創刊号の平尾氏のご論文をご参照いただきたい。

2007年10月から始まる秋学期の教育計画はおおよその学生数が分かる7月から開始し、現地採用試験や学生の申請書を参考にして見込みの日本語能力レベルを割り出し、必修クラス数をクラス１（対象学生３名：研究留学生プログラム初級１名、教員研修留学生初級１名、短期留学生１名)、初中級クラス数を１（対象学生７名：短期留学生初中級７名)、中級クラス数を２(対象学生14名：短期留学生中級14名）設定した。

		見込み学生数	最低履修選択科目数
研究留学生プログラム	初級	１名	7
教員研修留学生プログラム	初級	１名	3
	上級	１名	10
日研生プログラム	上級	48名	10
短期留学生	初級	１名	2
	初中級	７名	3
	中級	14名	3
	上級	28名	10

選択科目の履修については、それぞれのプログラムの趣旨に応じて別のカリキュラムを立てているので、上のように修了要件が異なる。

初級レベルの学生（研究留学生プログラム初級１名、教員研修留学生初級１名、短期留学生１名）は３名と少数ではあるが、研究留学生プログラム初級の学生には選択科目を７つ以上履修することを要件と課しているので、選択権を保証するため８科目を設定した。初中級レベルの学生は短期留学生初中級７名のみの予定である。これらの学生達にとっては選択科目を３つ以上履修することが要件とされているので、選択科目を11科目設定すると多すぎるように思われる。

しかし、前述のとおり、既習者には日本語の総合評価と個々の技能の食い違いが見られる。それに対応できるように選択科目は一つ下のレベルの授業ないし一つ上のレベルの授業を選択できるようにカリキュラムが組まれている。したがって、中級レベルの学生が初中級レベルの選択科目を履修する場合を考慮して、前学期と同様に 11科目設定した。中級・上級レベルの選択科目については、教員研修生上級レベルの学生１名が要件の10科目を履修し、日本語日本文化研修プログラムの学生48名が要件の10科目*を履修し、短期留学生中級レベルの学生14名が要件の３科目を履修し、同留学生上級レベル28名が要件の10科目を履修したとし、平均一クラスの学生数が８名だとすると、 次の数式のとおり必要科目数が算出され、

$$(1\times10+48\times10+14\times3+28\times10)\div8=101.5$$

これをもとに101科目設定した。なお、一クラスの学生数については、本センターは短期集中型のカリキュラム体制をとっているので、小教室が大半であり、その収容人数と教育効果から一クラスの学生数を経験的に８名が妥当であると考えている。

さらに10月から新設する日本語日本文化研修生特別プログラムのために開設する２科目を加え、選択科目総合計122科目設定した。

＊日本語日本文化研修プログラムを修了するための必要要件はコースワークによって異なる。詳細は五之治氏、山川氏の説明を参照されたい。この数字は概数であり、経験的なものである。

４．日本語・日本文化研修プログラム研究コース留学生の動向（五之治）

研究コースについて述べる前に、日本語・日本文化研修留学生プログラム（日研生プログラム・Ｊプログラム）全体の動向について触れる。日研生とは、母国の大学で日本語・日本文化に関する分野を主専攻とする学生であり、多くは学部の３年生か４年生で、中級または上級の日本語能力を有する学生であると定義づけられる。本センターでは1985年度から日研生の受け入れを行っているが、近年の学生数の動向は図１のようになっている。

年	学生数
1999-2000	19
2000-2001	25
2001-2002	30
2002-2003	46
2003-2004	42
2004-2005	46
2005-2006	49

図１　学生数の推移

２コース制について

2000年度あたりまでは学生数がさほど多くなかったため、日研生全員に単一のコースワークを課していてもある程度対応できたが、人数が増えてくると学生の目的が多様になり、単一のコースワークでは十分に対応しきれなくなった。そこで、学生たちの留学目的に鑑みて、プログラムの中に２つのコースを設けることにした。ひとつは研究を主目的とする学生のための「研究コース」、もうひとつは、広く日本語日本文化の知識を身につけ、社会で活躍するための日本語能力を高めたいという学生のための「研修コース」である。

2001年度はこの２コース制を試行的に運営していたが、2002年度からは明確にプログラムの中に２つのコースがあるという体制に整備した。さらに、研究コースは研究分野によって「日本語研究コース」と「日本文化研究コース」のサブコースに分かれている。コースワーク（修了要件）は研究コースとしては単一であった。

この段階では、ある意味「研究コース」＝「修了論文を書くコース」という位置づけであったが、２年間プログラム運営を行っているうちに、研究コースを選択する学生の中にも様々な目的意識があることが明らかになってきた。そこで、2004年度から研究コースの中に２つのトラックを設けることにした。ひとつは「論文作成トラック」、もうひとつは「自主研究トラック」である。

「論文作成トラック」はその名のとおり最終的に修了論文を作成することを目的とするトラックであり、研究テーマがある程度明確に決まっていて、研究論文を書く意志のある学生のためのトラックである。「自主研究トラック」は、主目的は研究であるが必ずしも論文を作成することを目的としない学生のためのトラックである。例えば次のような目的を持った学生が対象となる。「帰国後母国の大学で卒業論文を書くが、日本ではそのための資料・材料を集めること

に専念したい」「同じく卒業論文を書く予定だが、まだ論文作成のための十分な能力がないので、日本では論文作成のための基礎的な技能を身につけたい」。

コースワーク（修了要件）について

研究コースは以上述べてきたような学生のためのコースであり、その目的に合わせてコースワーク（修了要件）を設定している。修了要件はトラックにより若干異なる。最も大きな違いは、論文作成トラックの場合、修了時に提出する修了論文に対し独立して成績がつくということである。自主研究トラックの場合、修了時に提出する研究レポートは後述する専門演習（DR）の成績の一部として評価され、独立して成績はつかない。

図2　研究コースの修了要件

論文作成トラック修了要件

科目種別		最低履修授業科目数(コマ数)			
		秋学期	春学期	小計	合計
必修科目	専門演習	1	1	2	21
選択科目	研修科目	6以上		19	
	研究科目	6以上			
修了論文					

自主研究トラック修了要件

科目種別		最低履修授業科目数(コマ数)			
		秋学期	春学期	小計	合計
必修科目	専門演習	1	1	2	23
選択科目	研修科目	6以上		21	
	研究科目	6以上			

日研生の必修科目は専門演習（DR）のみである。学生は週に1コマ、指導教員と一対一で、または一対数名程度で研究の指導を受ける。修了時に論文作成トラックの学生は修了論文を、自主研究トラックの学生は研究レポートを提出することが義務づけられているが、そうした論文やレポートの作成指導もこのDRで行っている。このようにDRは学生個人個人の専門性に応える科目であり、きめ細かな指導を受けられる点で学生の研究に資するところが大きい。とはいえ、週1コマでできることは限られている。できるだけ豊富な選択科目を整備して提供することが、学生の多様なニーズに応えるためには不可欠である。

研究科目と研修科目

2001年度秋学期より、選択科目を「研究科目」と「研修科目」に大別するようになった。おおざっぱに言えば、研修科目は日本語能力を高めるための科目（日本語実習科目）と日本に関する全般的な知識を身につけるための科目（日本事情科目）である。研修科目は、特に日研生

のための科目というわけではなく、センターの様々なプログラムの留学生全体を対象とした科目であると言える。

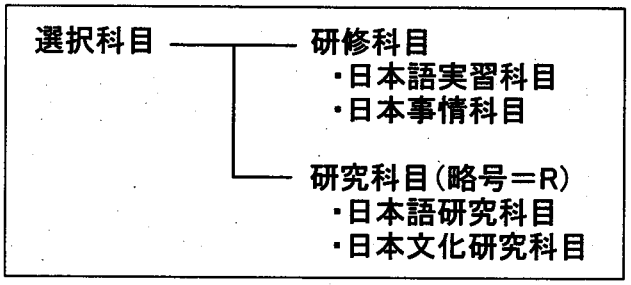


図3　選択科目の分類

これに対し、研究科目は各研究分野の専門的な知識を得るための科目である。ある意味、研究科目とは日研生プログラムのための科目である、さらに言えば、日研生プログラムの研究コースのための科目である、と言ってもよい。研究コースの学生は一年間でこの研究科目を6つ以上履修しなければならない。学生は1年間で最大限の成果をあげるために、指導教員と相談して自分の研究テーマに合った科目を選び、組み合わせて履修する。我々コーディネーターも、できるだけ学生のニーズに応えるべく、研究科目を充実させる努力をしている。

日研生は定義からすれば、すでに相当な日本語能力を持って留学してくる学生ということになるが、実情としては、渡日時の日本語能力にはかなりのばらつきがあり、全員が上級レベルというわけにはいかない。ただし、研究コースを選択する学生の中には、専門分野に関しては母国語で相当高いレベルの教育を受けている者もいる。また、そうでない学生でも、母国に戻ってから卒業論文を作成するために本センターで専門的な知識を身につけることを望んでいる、目的意識の高い学生が多い。そうした事情に鑑みて、学生が渡日したばかりの秋学期には中級レベルの研究科目を多めに設定している。秋学期の研究科目の授業を担当される先生方には、内容の専門性はある程度高く保ちながら、それを教授する日本語のレベルはできるだけ易しくするよう配慮していただければ幸いである。春学期に関しては、学生たちの日本語能力もかなり高まっているので、特に上級レベルの研究科目については、教授の日本語も授業内容も高いレベルに引き上げて授業を行っていただければ、学生の学力をさらに向上させることができるのではないかと考える。

5．日本語・日本文化研修プログラム研修コース留学生の動向（山川）

当日のパネルディスカッションでは、日本語・日本文化研修留学生プログラム（以下、日研生プログラムと称する）の中の研修コースで学んでいる学生の特徴およびニーズについてお話しさせて頂いた（なにぶん限られた時間内でのトークであったため話が急ぎ足になってしまい、十分な内容が提示しきれていなかったかもしれない）。本報告は、当日の発表内容をまとめ直したものであるが、当日のトークの不備を少しでもフォローできるものになっていれば幸いである。

日研生プログラムにおける2コース併置

まず、日研生プログラムにおいて「研修コース」という独自のコースが設置されたのは2002年（平成14年）10月からのことである（この時期より「研究コース」「研修コース」の2コースを設置する形態となった）。研究コースが、その名の通り“研究を志す”コースであるならば、研修コースは“実践”“実用”というのがそのキーワードになろうかと思われる。研修コースの具体的内容は以下のように定義されている。

・「研修コース」とは？

日本語を活用して社会で活躍することを希望する学生向けのコースです。研修コースでは、日本語の能力や技能を高め、実社会でも役立つ日本語・日本文化に関するさまざまな知識を身につけます。コース修了時に、高度な内容の日本語を正確に理解し、自分の意見等を的確な日本語で伝達できるようになることが、研修コースの目標です。

（『履修案内 Fall Semester 2002-2003』より）

・修了要件

最低履修授業科目数（別資料）に加えて、学内外で実施される様々な研修に参加し、その成果を日本語でまとめて報告する。

研修コースを選択する学生

以下は、過去2期において研修コースを選択した学生の分布（国籍・男女）であるが、男女比や国籍の観点からも特に注目すべき傾向などは見られない。また、具体的な資料をここで提示することは不可能であるが、各学生の日本語能力の程度とも特に関連などはないと言ってよい。強いて言えば、学生たちは、みな総じて活発で社交的である。この点、研修コース自体の意味合い・理念とうまく合致している。

2004-2005（全日研生46名）

オーストラリア	男1
イラン	男1
韓国	男1・女1
キルギス	女1
ニュージーランド	男1
ルーマニア	女1
スウェーデン	男1
米国	女1
ヴェトナム	女1

2005-2006（全日研生49名）

インドネシア	男1
イスラエル	男1
タイ	男1
中国	女1
ハンガリー	女1
イタリア	女1
韓国	女2
ルーマニア	女1
ウクライナ	女3
ニュージーランド	女1

研修コース学生の関心

過去2期に在籍した学生たちの興味・関心をリストアップすると以下のようになるが、2種に大別されるように思われる。

Ⅰ：経済、通訳・翻訳、日本の会社、日本人の働き方・・・

Ⅱ：日本文学、マンガ・アニメ、日本のスポーツ、日本舞踊、生け花・伝統技術、神道、浮世絵、着物、茶道、祭り、日本の音楽・・・

まず、Ⅰのように“将来のキャリアにつながるような実践的な関心”と言えるようなものと、“日本の伝統的あるいは現代的な文化に対する関心”とカテゴライズされ得るようなⅡのタイプとがある。しかし、学生たちの「将来」と明確にリンクする興味・関心はⅠタイプのものであると考えられる。

研修コース学生の将来の希望（過去２期）

「日本語教師」、「通訳・翻訳者」、「国際交流」、「日本で店を開く」、「日本関連の会社で働く」・・・は、最近のコース在籍学生の将来の希望の進路である。上述の、学生たちの興味･関心（Ｉタイプ）と少なからず関連するものばかりであり、なんらかの形で日本と関連のある仕事（特に、「通訳」という希望が圧倒的に多い）に就くことを希望している。「研究者」などの希望はほとんどない。

研修内容の類型

研修コースの学生たちは、通常の授業履修に加えて、学内外で実施される様々な研修に参加しなければならないことになっている。最近の主な研修には以下のようなものがある。コースをコーディネートする立場としては、バラエティーに富んだ内容の研修を企画することを心がけているが、その時その時の在籍学生の興味･関心を常に小まめにチェックするように努め、その結果を少しでも研修企画にフィードバックさせていくことが肝要であろうかと思われる。

①研修旅行、見学旅行

事前調査、旅行栞作成、実地見学、他プログラム学生への通訳・説明

②伝統芸能鑑賞会

事前講義、歌舞伎・文楽鑑賞

③企業における意見交換会（ＪＲ西日本）

オリエンテーション、感想文発表、意見交換、接客ロールプレイなど

④日本語・日本文化施設訪問

・大阪歴史博物館

博物館職員による講演（大阪の歴史・文化）、博物館見学

・宝塚市立手塚治虫記念館

アニメ製作体験、記念館見学

⑤教育施設訪問

・独立行政法人国際交流基金関西国際センター

施設見学、当該センター留学生との交流

⑥通訳・翻訳に関する連続セミナー

プロの通訳の方を講師に招いての４回連続形式のセミナー。通訳ガイド試験や実際の通訳トレーニングを実践。

研修コース学生の求めるもの：まとめに代えて

研修コース学生のニーズとはどのようなものかを考えてみる場合、「研修内容」「授業内容」双方について分析されねばならないが、ともに、ほぼ同様の特徴が指摘できるように思われる。(1)“興味・関心を満たすもの”であり、(2)“日本に居なければ体験できないもの・内容”であり、そして(3)“将来の希望の進路に有益（と思われる）もの”を学生たちは求めていると考えられる。このようなニーズは実際の授業履修にはそれほどはっきりとは表れてこないことが予想されるが、それでも過去２期における研修コース在籍学生の履修状況を見てみると、研究科目においては圧倒的に「日本文化研究科目」、特にCUL（日本文化系統）とSOC（社会科学系

統）の科目の割合が多くなっている。科目履修の状況は、学生たちのニーズがかなり反映されたものであると考えることができるであろう。

6．短期留学生の動向（今井）

本学Maple Programは、日本学生支援機構（JASSO）が行っている短期留学推進制度に沿って設置された外国人留学生受入プログラムである。修業期間は、3ヶ月以上12ヶ月以内と定められているが、本学が受け入れる学生のほとんどが1年間の滞在を希望している（ただし、Maple Programは10月に始まり8月で終了するため、実質11ヶ月間の滞在となる）。また、短期留学推進制度では、日本語の授業は必ずしも必須ではないが、本学へ留学を希望する学生は基本的に日本語の学習を希望することがほとんどであるため、Maple Programには後述のように日本語を学習するためのコースが設置されている。

Maple Programには、International Studies Course（略称ISC）とJapanese Studies Course（略称JSC）の2つのコースがある。ISCは、本学外国語学部で提供されるコースで、国際関係、国際経済、外国語教育、日本と外国の対照研究、等について、基本的に英語で行われる授業から成っている。JSCは、本学日本語日本文化教育センター（以下CJLC）によって提供される日本語学習のためのコースである。以下では、JSCの特徴および問題点について、主に学生側からの視点で述べることにする。

上記のような体制での運用が開始されて既に5年が経過したが、その間、大学全体の取り組みによって協定校が増加したこともあり、Mapleの学生数は年々増加してきた（図1参照）。

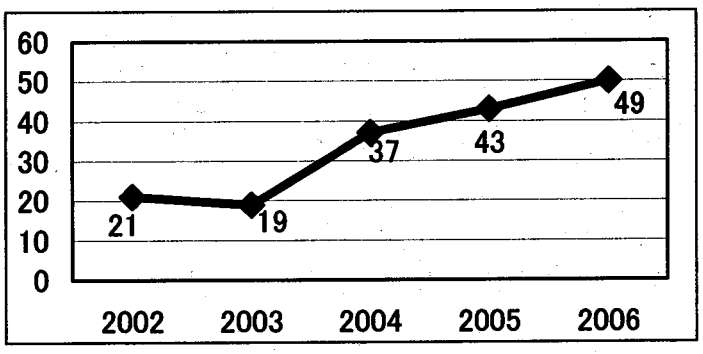


図1　Maple学生数の変遷

また、本学の性質上、受け入れる学生の専門は文科系（言語・文化・社会）がほとんどで、その中でも日本語・日本文化を専攻する者が最も多い。2007年3月現在の在籍者のうち、日本語や日本文化を専攻する者は32名、日本以外の言語・文化を専攻する者は7名、国際関係・経済学・経営学・法学を専攻する者は7名、その他の専攻は3名（コンピューター工学、料理学、建築学）である。日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）に比べれば専門は多様であり、その多様性に応じて日本語のレベル、日本語学習のモチベーションの高さにばらつきがある。

前述のように、JSCは研究留学生の日本語予備教育を基にしてカリキュラムが組まれているが、研究留学生カリキュラムは半年間の学習を前提としているため、Maple学生のように2学期にわたって履修する場合には、学習者のレベル設定に関していくつかの問題が生じる。図2は、2005年度秋学期から2006年度春学期にかけてのMaple学生のレベル変遷である。

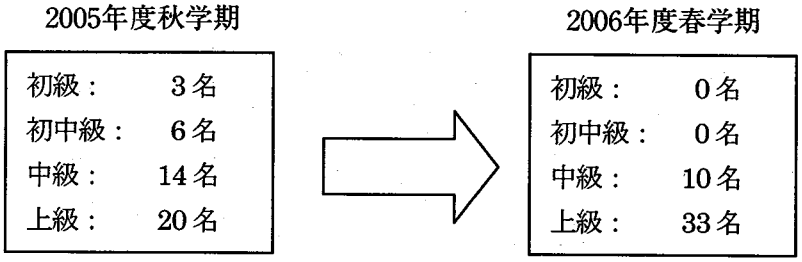


図2　Maple学生のレベル変遷

レベル判定は、基本的に学期開始時のプレースメントテストによって行う。このとき、秋学期の初級3名と初中級6名は、春学期には中級レベルと判定された。しかし、前者が渡日時には全く日本語ができなかった学生であるのに対し、後者は渡日前に2～3年間の日本語学習を経てきた学生が多い。したがって、文法のテスト結果はほとんど同じでも、漢字や語彙の知識量に違いがあり、授業の種類によっては授業運営に困難が伴うこともある。同様のことが春学期の上級レベルにも当てはまる。Maple学生が少なかった頃には、このような問題はあまり表面化しなかったが、学生数が増加するにつれ顕在化してきた。プレースメントテストのあり方も含めた検討が必要であろう。

この問題と関連して、春学期の選択科目の授業についても問題が生じることがある。CJLCでは、各学生の技能のアンバランスを考慮し、上下1レベルの選択科目授業の履修を認めている。例えば、中級の学生であれば、初中級や上級の授業も履修できるわけである。したがって、春学期の中級選択科目においても、上級の学生と中級の学生が混在することになる。しかも前述のように、上級と中級の中にも様々なレベルが混在しているため、1つのクラスの中で非常に大きなレベル差が生じることがある。また、春学期には中級が「少数派」になるため、中級の授業にもかかわらず、上級の学生が多数を占めることも多い。そのような場合に、上級の学生を中心に授業が進められてしまうことがあり、本来の中級レベルの学生にとっては大きな不満の原因となる。さらに、前述のようにMaple学生の中には日本語の学習に対してそれほど強いモチベーションを持っていない者もおり、それがそのような不満に拍車をかけ、授業に対して無気力になるといったケースも見られる。学期開始に当たっては、本来のレベルの学生が一人でもいる場合には、その学生に合わせて授業を進めてもらうよう選択科目担当の講師にはお願いをしており、今後もこの点の周知徹底に努めていきたい。

その他に、Maple学生の多くが日本語自体の学習にそれほど強い動機を持っていないことが多いため、春学期の必修科目（中級文法）に対して、意欲をなくしてしまうことも時に見受けられる。このような問題については、必修科目（中級文法）をさらに小さいユニットに分けるなどの工夫が必要と思われる。

日本文化の授業としての宗教

頓宮　勝

A．授業を構成するに当たっての出発点

1．日本人の宗教や思想を考える場合に、仏教、神道など個々について、また両者の関わりとしての神仏習合などについては豊富な研究書があるが、日本文化の一項目として留学生のみならず日本人学生の授業で参考に出来るものはそれほど多くはない。

2．一方で、戦後の日本では「宗教」ということばに対する無意識的な拒否反応が存在し、特に神道ということばに対しては戦前という過去に結びつけ否定的に捉えられる。

3．従って、留学生の多くが、神社仏閣が多数存在し、また参詣者が多いにもかかわらず、どうして「無宗教」だと答える日本人が多いのか、という疑問を抱く。

4．その疑問への的確な答えとして、一般的には「～教」と綴られるのに、どうして日本の「カミ」信仰が「神道」と呼ばれたのか、という点に焦点を当て授業を進めている。

B．授業目標の骨子

日本文化と日本人の考え方を理解するために、先ず宗教的背景として日本人が無意識の中に把握している神と仏の概念並びにその歴史的関係を説明する。さらにそのように形成された宗教観が、剣道や茶道などのように「道」を付された文化・芸術に潜む思想と関連を持つことを指摘し、日本人の思考法とそれに関連する宗教を新たな視点から考察する。

C．授業進行の概略（①などの数字は当日配布した資料番号を示す）

1．文化の定義と宗教（3時間）：生活の糧である食材を与えてくれる自然を主体的に捉えその本質を解釈した上で、様々な素材を使って物質及び精神的に表現・加工されたものが文化であると定義し、その基盤に生死に対する解答としての宗教を置く。具体的には、『日本タテヨコ』で述べられている「日本人の自然観」と「日本人の宗教心」の妥当性、さらに一神教と多神教という区別を再検討した上で、①に基づき「カミ」はGodでもgodsでもdeitiesでも無いことを、仏像の中で～devaと呼ばれるものが中国では「～神」ではなく、梵天、弁才天など、～天と訳されたという事実に基づき説明する。

2．明暗二分法に基づく日本文化の根底にある自然界と人間界の等置（5時間）：③～⑤を使用し、豊かな食材供給の場としての森山・沿岸に主として展開した列島文化の特徴が、この世（可視＝もの）からあの世（不可視＝こと）、明から暗への過程として把握された、輪廻観とは似ているようで異なる死生観に基づくものであり、それが後の経過・経験としての「道」に繋がることを概述する。又それが幽玄、わび、さび、もののあはれとも関連する一方で、「神道」とはあの世である「たまの世界」への道程であることを示す。

3．インド、中国、日本それぞれにおける仏教理解（2時間）：仏教発祥の地であるインドにおける思想基盤が理論（空の思想）であり、伝承地中国におけるそれが実践（無の思想）であるなら、日本においては情感（あの世観）に集約されることを説明する（資料⑥）。

4．文献購読（5時間）：仏教及び神道に関する基本的文献を、上記講義内容と対比しながら講読し、1～3で述べた宗教観に基づく日本文化的の性格について考察する。

留学生にとって役に立つ漢字とはどのようなものか－漢字授業経験から－

國方　栄二

1）常用漢字の授業

教育漢字なら教育漢字を、常用漢字なら常用漢字を全部教えてみようという試み

教育漢字は1006字、それを含めた常用漢字は1945字あるので、「教育漢字」の授業でおよそ1000、「常用漢字」の授業（教育漢字を除く常用漢字の授業の意味）で残りのおよそ1000を教えることになる。すると、1年で終了を目指すと毎回40字くらいを教えるのがよい。わたしは留学生向きの漢字のテキストではなく、高校生向きのワークブックを使用している。この方針には長所、短所があるが、常用漢字をシステマティックに全部教えるという目標のためには、ワークブックのほう使いやすい。小テストによる確認は重要なので毎回おこない、同時に各学期で2回大きなテストをおこなう。つまり、同じ漢字をテストのために2回覚えることになり、これによって完全修得を目指す。大きなテストは500字くらいが対象になり、400～420字出題する。

問題点：「匁」「匂」「斤」などの漢字は日常ほとんど使用されないにもかかわらず、常用漢字に収録され、他方、「脇」「椅」「畏」「斬」「韓」などの漢字は収録されていない。

常用漢字でなくても、比較的よく使われていると思われる漢字は教えたほうがよいということになる。しかし、これはそれほど簡単な問題ではない。漢字の使用頻度は、現代において書かれた文書をいくつか選び、それを母集団ということにして、同じ漢字がどれだけの頻度で使用されているかを示したデータをつくることは可能であり、実際にそのようなデータがある。しかし、教える漢字と教えない漢字の境界を設定することは意外と簡単ではない。留学生によっては、かなり難しい文章を読んで研究する人が少なくなく、しかもこれは日本文学を研究している学生に限られない。また、現代の日本人が書いている文章にはしばしばむずかしい漢字が現れる。われわれも自分が文章を書くときに、常用漢字までに制限しているかというとそうではない。

2）表外漢字の授業

今の問題に対処するために、「表外漢字」（約1000字）を教えることを始める（2000年9月における国語審議会発表 「表外漢字字体表（案）」に基づく）。これも毎回40字教え、毎回テストをする。テキストはまったく手作りで、漢和辞書を利用した。そして、春、秋2学期で4回の大きなテストをする。テストは一応、「読み」と「読み・書き」の二種類を作成し、学生に選択させる。つまり、読み方だけを覚えたい学生と書き方も覚えたい学生を分ける。したがって点数に不公平が生じるが、これは最終評価において調整する。しかしこの配慮は多くの場合不要である。読み・書きを選択する学生の多くが90点以上をとっているためである。

教育漢字は日常生活において最も使用頻度の高い漢字であるから、これを留学生に修得させることは極めて重要なことである。しかし、このことは日本に来る留学生にとって最も役に立つ漢字が教育漢字であるということを必ずしも意味してはいない。むしろ、留学生にとって何が役に立つ漢字かという問題は、結局、学生が授業においてどういう漢字を、どの程度において学ぶことを求めているのか、このことを考え、配慮しながら進めていくなかで解決されるものではないかと思われる。

（付記）発表の機会をあたえてくださったセンターの関係各位に、あらためて御礼申し上げる。